

釣り人を対象としたアンケートによる尻別川での釣り実態調査

松枝直一・竹内秋義・田中慶子・菅原敬展・木谷 淳・斎藤幸雄
(後志支庁産業振興部水産課)

尻別川は道央圏でも有数の溪流釣り河川として知られ、古くから多くの釣り人に親しまれてきました。現在でもヤマベ(サクラマスの子魚)、ニジマス、アメマスといった溪流魚やアユの釣り場として有名で、釣り情報誌や新聞に頻繁に紹介されています。魚が豊富で、四季を通じて多くの釣り人を魅了する尻別川ですが、その魚類の生息環境は必ずしも良好というわけではありません。かつては1mを超すイトウが数多く釣れたそうですが、残念ながら最近では尻別川のイトウは絶滅寸前の状態となっています。河川内でのイトウの往来を阻む河川横断工作物による流路の分断や河川改修による産卵環境の喪失がイトウ減少の大きな要因と考えられています。「尻別川の未来を考えるオビラメの会」が稚魚の放流を行うなど、尻別川のイトウ個体群の復活を目指して懸命な活動をしています。こうした活動には多くの釣り人、関係者が関心を寄せています。

在来魚とその生息環境、河川生態系の保全に向けた意識が高まる一方で、最近ではブラウントラウトやブラックバスなど外来魚の分布域の拡大と生態系への影響が全国的な問題となっています。平成14年に道立水産孵化場が実施した調査では、尻別川支流の昆布川でもブラウントラウトが多数生息し、場所によってはヤマベよりも高い密度で分布していたことが報告されて

います(北海道立水産孵化場, 2004)。この報告書では、外来魚の分布拡大には河川改修による魚類生息環境の改変が関わっている可能性が述べられています。尻別川の貴重な在来種の保全のためには、魚類生息環境の現状、水系内での在来魚と外来魚の分布の状況を把握することが重要であると考えられます。

羊蹄山麓の7町村では、尻別川の流域環境保全を目指して各種の施策を推進しています。後志支庁としても流域町村や多くの関係者の皆さんと共同で、尻別川流域の環境と景観の保全に向けた取り組みを実施していく考えです。ここでは当支庁が平成17年と18年に実施した「尻別川の魚を守る」呼びかけ事業の主な取り組みである、釣り人アンケートによる尻別川での釣り実態調査について紹介したいと思います。本調査では、現在、尻別川を訪れる釣り人がどの支流でどの魚種をどのくらい釣っているのか、あるいは釣りたいと思っているのか、尻別川の河川環境をどのように見ているのか、などをアンケート形式で調査しました。この調査を通じて、現在の尻別川の釣り人による利用の実態と釣り人の皆さんの意識を把握し、それらの意見を今後の流域保全の取り組みに反映させていきたいと考えました。

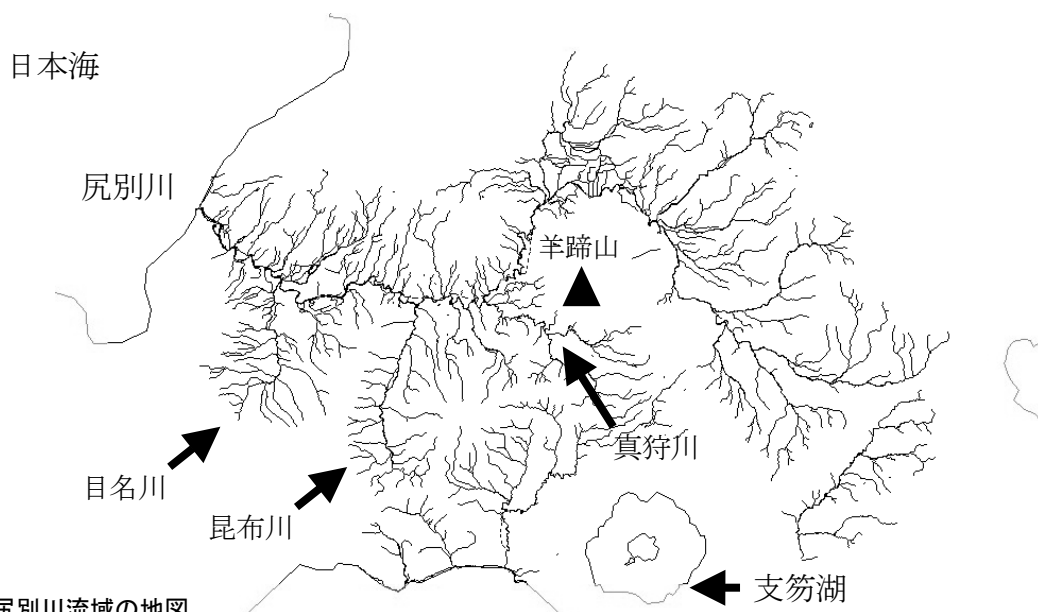


図1 尻別川流域の地図

調査方法

平成 17 年と 18 年の 6 月から 12 月にかけて、尻別川水系で釣りをした人を対象として、①居住地、②年齢、③釣りの方法（餌釣り、ルアー、フライ、友釣り、など）、④釣獲場所、⑤魚種別の釣果（対象魚は、平成 17 年度：サクラマス・アメマス・ニジマス・ブラウントラウトの 4 種、平成 18 年度：全魚種）、⑥釣った魚の全長、等についてアンケート調査を実施しました。アンケート用紙は後志支庁のホームページ上で公開し、また、流域市町村や後志管内及び札幌市内の主な釣具店に料金受取人払い封筒とともに配布し、記入した上で後志支庁宛に郵送してもらいました。さらに、同じアンケート用紙を尻別川で釣りをしていた人に直接配布し、調査に協力してもらいました。協力を頂いた皆さんには、尻別川流域 4 町村営温泉施設共通利用券を作成し薄謝と致しました。

アンケートの中では尻別川の河川環境や釣りに関する下記の項目にも回答してもらいました。

- Q1 尻別川の魚類生息環境をどう思いますか（良い・悪い・普通）。
- Q2 Q1 で「良い」あるいは「悪い」理由は何ですか。
- Q3 尻別川で魚類の生息に支障を来している河川工作物はありますか。

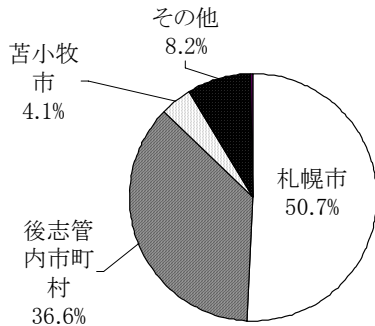


図 2 アンケート回答者の居住地

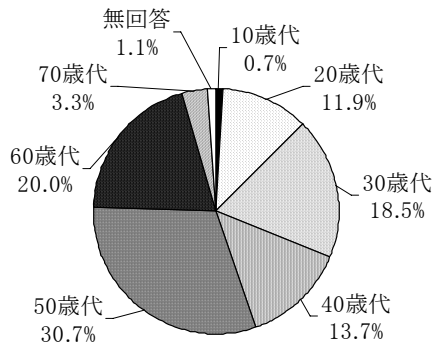


図 3 アンケート回答者の年齢

Q4 尻別川水系での釣りに期待する魚は何ですか。

これらのアンケート調査に対して釣り人の皆さんから寄せられた回答のうち主なものを以下に紹介します。

結果

釣り人の居住地、年齢、方法など

アンケートへの回答者数は、平成 17 年度は 168 件、18 年度は 268 件でした。ここでは報告件数の多かった平成 18 年度の結果を以下に紹介します。

情報提供者の居住地で最も多かったのは札幌市で 50%を超えており、次いで後志管内の市町村、苫小牧市の順となり、道央圏が中心となっていました（図 2）。回答者の年齢は、10 代から 70 代まで幅広い年齢層にわたっており、最も多かったのは 50 歳代で全体の約 30%でした（図 3）。釣りの方法はエサ釣りが 54.5%と最も多く、次いでルアー釣りが 31.6%、フライ釣りが 10.5%となっていました（図 4）。次に、報告件数を月別に見てみると、最も多かったのが 9 月で 110 件（41.0%）、次いで、8月と 10月が並んで 46 件（17.2%）、7月が 45 件（16.8%）の順となっており、7～10 月で全体の 92.2%を占めていました（図 5）。このことから、尻別川への入釣者が多いのは 7～10 月で、最も多いのは 9 月で、雪が降るようになる 11 月以降は入釣者が少なくなることがわかりました。

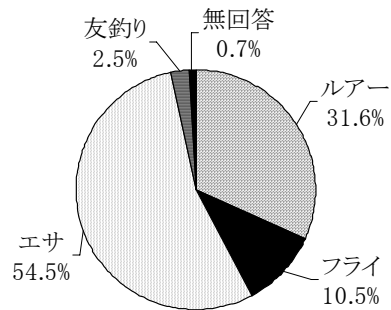


図 4 釣り方法の割合

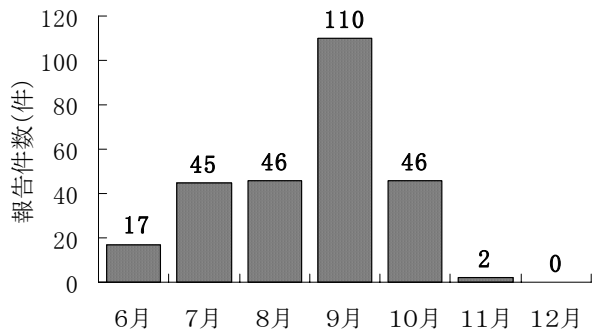


図 5 月別釣果報告者数

表1 平成 18 年の尻別川本支流での魚種別釣果

	本流		昆布川		真狩川		その他の支流		全体	
	尾数(尾)	比率(%)	尾数(尾)	比率(%)	尾数(尾)	比率(%)	尾数(尾)	比率(%)	尾数(尾)	比率(%)
ヤマベ	2,165	69.4	3,000	97.3	161	47.8	3,201	69.4	6,507	79.1
アメマス	44	1.4	47	1.5	6	1.8	269	5.8	325	3.9
オシヨロコマ	20	0.6	6	0.2	4	1.2	33	0.7	44	0.5
ニジマス	425	13.6	15	0.5	166	49.3	576	12.5	807	9.8
ブラウントラウト	16	0.5	13	0.4	0	0.0	18	0.4	31	0.4
アユ	207	6.6	1	0.0	0	0.0	207	4.5	208	2.5
ウグイ	241	7.7	0	0.0	0	0.0	308	6.7	308	3.7



図6 釣り人のビクの中身 (左: ヤマベ、右: アメマスとブラウントラウト)

釣獲尾数

釣果を魚種別に見ると、最も多かったのがヤマベで全体の79.1%、次いでニジマスが9.8%、ブラウントラウトは0.4%にとどまっていた(表1)。主な支流別に釣果組成を見てみると、本流ではヤマベが約7割を占めており、ニジマスが13.6%、次いで、ウグイ、アユ、アメマスの順となっていました。昆布川ではヤマベが90%を超えており、釣れる魚のほとんどがヤマベであることがわかりました。一方、真狩川ではニジマスが約半数を占めており、ヤマベとほぼ同数となっていました。このように支流間で釣られる魚種に明瞭な違いが見られました。今回の調査で寄せられた釣果情報を魚種ごとに尻別川の地図上に記した図を巻頭ページに示しました。それを見ると、尻別川水系でも支流間、上下流間で釣りの対象となる魚種、すなわち、生息する魚種に明瞭な違いがあることがわかります。水系全体への分布拡大が心配されていたブラウントラウトは、本流の中流域と支流の昆布川域でのみ釣られていました。

釣られた魚で最大のものは、アメマス 53 cm、ヤマベ 29 cm、ニジマス 57 cm、ブラウントラウト 54 cm、

オシヨロコマ 25 cm、アユ 21.5 cm (いずれも全長) でした。

次に、釣り人一人あたりのヤマベの釣獲尾数を本流、昆布川、真狩川の上中下流別に見てみました。昆布川全域と本流の下流域で顕著に多い傾向が見られ(図7)、これらの場所でヤマベの生息尾数が多いであろうことが示唆されました。

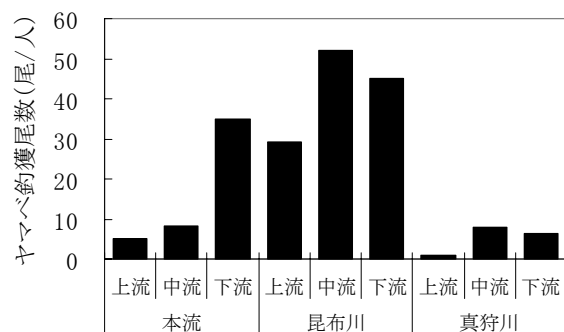


図7 支流ごとのヤマベの釣獲尾数

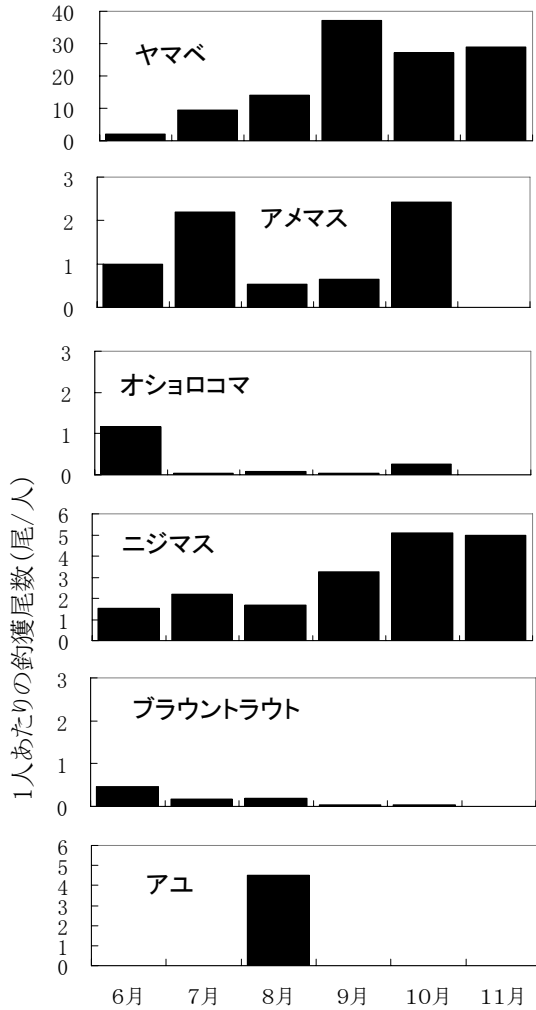


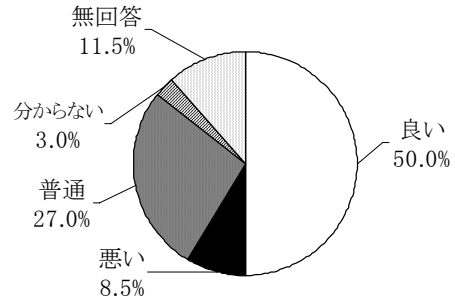
図8 魚種別・月別の一人あたり釣獲尾数

釣獲尾数を月ごとに見てみると、魚が多く釣れる時期は魚種ごとに異なることがわかりました(図8)。ヤマベやニジマスが9月以降に多く釣れるようになるのとは対照的に、オシオロコマ、ブラウントラウトでは、数は少ないものの、6月に最も多く釣られており、夏場以降は少なくなることがわかりました。アメマスは7月と10月に多く釣られる傾向がみられ、アユの釣果が見られたのは8月のみでした。

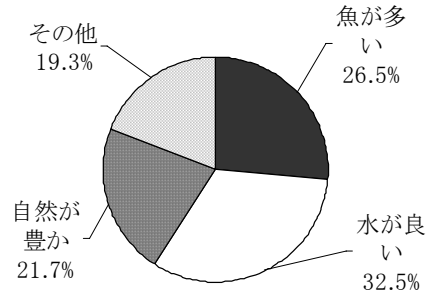
尻別川の河川環境と釣りについて

尻別川での釣りに関する意識や河川環境に関するアンケート結果について述べたいと思います。Q1「尻別川の魚類生息環境をどう思いますか」の問いに対して、「良い」と答えた人は全体のちょうど半数、「普通」と答えた人が27.0%、「悪い」と答えた人は8.5%となっ

Q1 回答割合



Q2 「良い」理由の回答割合



Q2 「悪い」理由の回答割合

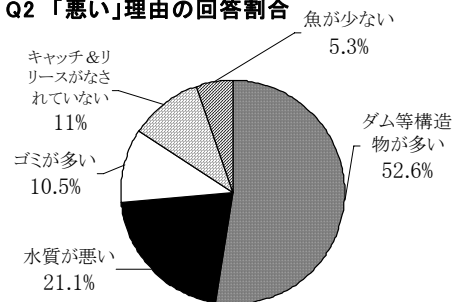


図9 「尻別川の魚類生息環境をどう思いますか」の問いに対する回答とその理由

ていました(図9)。「良い」と答えた人の理由としては、「魚が多い」、「水がきれい」、「自然が豊か」が多数を占めました。一方、「悪い」と答えた人の理由では、「ダム等構造物が多い」、「水質が悪い」、「ゴミが多い」、「魚が少ない」などが多数を占めていました。具体的には、河畔林伐採や護岸等河川工事による流域環境の悪化、農業系の廃棄物の投棄に関する指摘が複数みられました。

アンケートのQ3「尻別川で魚類の生息に支障を来している河川工作物がありますか」の問いに対しては、発電用取水ダム、砂防ダムを中心に具体的な施設を指摘した回答が複数みられました。また、魚道の機能を疑問視する意見や周年を通して魚道の入り口に堰板が設置されたままで機能していない箇所を指摘する回答も見られました。このように、釣りをする中で河川内

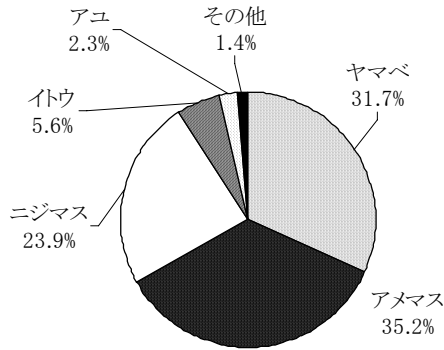


図 10 「尻別川水系での釣りに期待する魚は何ですか」の問いに対する回答



図 11 釣り人からの人気が高かったアメマス（下）とヤマベ（上）

構造物によって魚類の往来が阻まれていることを問題視する釣り人が多いことがわかりました。

Q4「尻別川水系での釣りに期待する魚は何ですか」との問いに対しては、アメマスと答えた釣り人が最も多く、3割を超えていました。ヤマベも同じく3割を超えており、次いで、ニジマス(23.9%)、イトウ(5.6%)、アユ(2.3%)の順となっていました。小数意見としては、サケ、オシロコマ、ナマズ、ブラウントラウト、ブラックバスがありました。

また、イトウの個体群復活を期待する意見、オシロコマの保護を訴える意見、10年以上前と比べて魚が減ったとの意見がそれぞれ複数見られました。釣りの対象魚としてはニジマスに期待する意見が多数見られたのに対して、ブラウントラウトについては期待よりも分布の拡大を懸念する意見のほうが多く見られました。

終わりに

平成17年、18年の2カ年にわたるアンケート調査の結果、ヤマベ、アメマス、ニジマスなどサケ科の魚種を中心に、多くの釣り人が尻別川で釣りを楽しんで

いることが確認できました。尻別川の河川環境、魚類の生息環境については河畔林の伐採、護岸ブロック、横断工作物などに問題意識を持つ意見が多く見られました。また、ゴミを捨てていく、小型の魚を大量に持ち帰るなど、マナーの悪い釣り人がいるとの指摘も多く、釣り人のマナー向上の必要性を唱える意見も目立ちました。魚の減少、外来魚の分布域の拡大を心配する意見も多く見られ、流域環境、魚類資源の保全への意識の高さが感じられました。

本調査で確認できたように、尻別川は羊蹄山麓の豊かな自然に育まれた魅力的な釣り場であり、かけがえのない地域の財産です。本調査では尻別川の魚類の生息環境に影響を与えている要因(横断工作物、外来魚、ゴミなどの問題)について、釣り人の皆さんの視点からいくつもお指摘いただきました。河川環境を改善して、魚類の生息環境を保全し、尻別川の貴重な魚類個体群を維持するために、今後も釣り人を含む関係者の皆さんと連携を強めていきたいと考えています。

最後になりますが、2カ年にわたり多くの釣り人の皆さんの協力を得て本調査を実施することができ、たくさんの貴重なご意見をいただくことができました。そのすべてを本誌で紹介することはできませんが、今後の尻別川の流域保全に向けた取り組みの参考としていきたいと思っております。本調査にご理解とご協力をいただきました多くの釣り人の皆様にあらためて厚くお礼申し上げます。

参考文献

北海道立水産孵化場(2004)千歳川支流および尻別川支流におけるブラウントラウトの分布.平成14年度事業成績書,133-135.

(まつえだ なおかず:

後志支庁産業振興部水産課漁業管理係長)